
魔法少女リリカルなのはSTREAM

碓谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはSTREAM

【Nコード】

N4851M

【作者名】

碓谷

【あらすじ】

J・S事件から数年

ミッドチルダではロストログニア絡みの事件が増加していた

この事態を重く見た管理局上層部は

J・S事件を解決に導いた機動六課部隊長八神はやてに機動六課の再結成を依頼した…

新たに立ち上がった新分隊そしてカリム・グラシアの暗躍？で任命された分隊長…

新たな物語が今駆け抜ける…

プロローグ

少年は少女を護る為に剣を振る

全ての災厄から愛しき人を護る為に魔法を使う

彼女の願いを叶える為に彼は…

時空管理局本局人事部受付

男は書類を手に叫んだ

「またかよカリムウウウウウウウツッ!!」

書類には

「以下の者を遺失物管理部新機動六課に異動……………ジル・フィード二等空尉」

と書かれていた

主人公

ジル・フィード

32歳

男

二等空尉

新機動六課ストリーム分隊隊長

デバイス：血誓写本・指輪型インテリジェンストデバイス ワークス

容姿：黒い長髪を首の辺りでまとめている

右が黒左が紅のオッドアイ

身長はシグナムより少し高い位

目付きは悪いがイケメン（本人は悪人面のために目を逸らされている
と思うている）

酒好き（酒蔵を所持している模様）だが強すぎてあまり酔えない（
酔っても悪酔いしかしない）

孤児院を教会とは別に経営している

一応元教会騎士団師団長

カリムとは本人達曰く腐れ縁

ヴェロツサは弟分

シャツハは苦手

クロノとは面識アリ

当時勝手に元帥候補者にされていたために元帥候補と呼ばれる

（全力で拒否したらしい）

一応師匠がいるらしい

新機動六課

ここはミッドチルダ東部次元港第二エントランス

「はああゝ」

男は途方に暮れていた

なぜなら

「東部次元港第二エントランス出入口前であつてるはずなんだがなあ」

待ち人が来ないからである

「勝手に向かおうにも…」

右手に持った書類に目を通す

やはり住所や地図の類いは無く

案内人との待ち合わせ場所しか書かれていない

「仕方ない後20分待つて来なかったら自力で行くし…」

等と考えていると

「あのすいません」

と声をかけられた

「はいなんですか」

とりあえず声の主を確認するため顔を向けると

「あの今日から機動六課に配属するジル・フィード二等空尉でありますか？」

綺麗な藍色の髪をした女性が立っていた

「はい自分がジル・フィードですけど」

女性は頭を下げながら

「捜査資料の整理をしていたら予定の時間を過ぎてしまっていて本当に申し訳ありません」

すごい勢いで謝罪された

「あゝ大丈夫ですから頭を上げて下さい」

それから数分何度も謝る彼女を落ち着かせ自己紹介をした

「俺はジル・フィード二等空尉だよしくな」

「私はギンガ・ナカジマ三等陸尉ですよろしくお願いします」

「それじゃあナカジマ三尉これからどうするだ？」

「あの、私のことはギンガって呼んでくれませんか？」
「ん？何か問題でもあるのか」

ギンガは恥ずかしそうに言った

「実は部隊には妹達も配属されていてその…」
俯いてしまった

「そういうことなら了解した俺のことモジルで良いよギンガ」

「えっと…それじゃあジルさんで／＼／」

ギンガは何故か顔を赤くしながら言った

「それでさギンガ」

「はっはいっなんですか？」

ジルは時計を見ながら

「時間とかって大丈夫なのか？」

ギンガは慌て時計を見ると

「あっ…」

予定を一時間ほど過ぎていた…

新機動六課隊舎

部隊長室

「遅いですねえギンガ」

十歳位の少女がお茶を飲みながら言った

「ほんまやねえもっついてもええころやのに」

関西弁の女性が入口を見つめる

「ですねえ」

少女も入口を見る

二人はこの部屋の主である

女性の名前は八神はやて

この新機動六課の部隊長である

そして少女はリンフォース？「ツヴァイ」

八神はやての融合騎で家族である

「やっぱりリンも一緒に行った方がよかったですかねえ」

「前のリンならそうやけど今は違う子一人ついていくんと変わらんやろ」

「それもそうですね」

そう今リンは人形サイズではなく普通の人間サイズなのである

「でもこの方がはやてちゃん達のお手伝いをするのに便利ですしねえ」

そしてまたお茶を飲む

等と話していると扉の向こうから

「八神部隊長ギンガです宜しいですか？」

待ち人が到着した

「入ってええよ」

返事をすると思扉が開き

「失礼します」

二人の男女が入ってきた

「遅れてすいません八神部隊長」

「ええよ気にせんでも」

そしてはやてはジルの方を向き

「えっと…はじめましてやったな部隊長の八神はやて二佐ですよろしくな」

握手を差し出す

握手を返しながら

「こちらこそはじめましてジル・フィード二等空尉ですよろしくお願ひします」

握手を終えると

「ジルは自分が何をするかとかってきいとるかな？」

「いや聞いてないな」

「えっ…ほんまに？」

聞き返された

「本当だ」

正直に答えるしかなかった

「じゃあないなあ説明するからそこに座ってくれへんか」

応接用のソファーに座る

「あっ…ギンガは廊下で待機や」

「はいっ」

ギンガは廊下に出ていった

「じゃあ説明しよか」

はやてはジルの正面に座る
その後ろに少女が立っている

「あの部隊長彼女は？」

「この子は私の補佐の」

「リインフォース？空准尉ですうよかったらリインと呼んで下さいですう」

「そうかよろしくリイン」

「よろしくですよお」

「説明始めてもええかあ？」

「お願いします」

説明は新機動六課の設立経緯から始まった

.....「言うわけでジルには悪いけど異動して貰ったちゅう訳や」

（マジかよ）

ジルは頭の中で今の説明を整理する

設立の経緯はこうだ

昨今急増しているロストログアの強奪盗掘事件

これに危機感を感じた本局はJ・S事件解決の鍵となった旧機動六課部隊長八神はやてに再び部隊設立を依頼し更に彼女の希望で元六課メンバーが集められた

その上保有魔導師レベルの大幅な緩和（とは言えリミッターが無いわけではないが）で新たにもうひと分隊組む事になったそうだがここで問題が発生した肝心の分隊長が決まらないのである

そこで知り合いに相談したところ俺に白羽の矢が立ったという訳だ

まあその共通の知人とは聖王教会騎士カリム・グラシアである

俺は彼女の微笑み（絶対に逆らえない）を思い出し溜め息をついた

「で分隊名は決まってるんですか？」

「実はなあ……」

不意にはやての目が泳ぐ

「分隊名は分隊長が決めるんですよ」

ラインが続ける

「他の分隊はスターズとライティングと隊長さんのシンボルと同じなんですよ」

「星と雷か……」

ジルは呟いて考える

「……………風いや気流か」

ジルは呟く

「気流かあほんならストリームてところかな」

「良いですねえストリーム分隊カッコイイですう」

リンがはしゃぐ

「じゃあストリーム分隊長ジル・フィード二等空尉
はやてに呼ばれ返事をする

「なんでありますか八神部隊長」

はやては微笑みながら

「これからストリーム分隊を演習場に集合させるから挨拶しとき」

「了解しましたそれでは失礼します」

ジルが出て行くのを見て

「リン」

「連絡済みですよはやてちゃん」

「おおきになほなお仕事しよか」

「はいです」

ギンガSIDE

部隊長室の前で待機していると

「おおまだ居たのか」

彼が出てきた

「えっと確か演習場ですよね」

「スマンなギンガにもやる事あるだろうに」

「良いんですよ今日から私は貴方の副官なんですから」

彼は何故か驚いていた

「そうなのか？」

「そうですね聞いてないんですか？」

「ああ設立経緯と異動の経緯あと分隊長だって事位しか…」

「じゃあ隊員の事は全然？」

「聞いてないな」

まさかはやてさんが忘れるはずはないし…

「ギンガちよつとええかあ？」

いきなり念話がきこえる

「はい大丈夫です何かありましたか？」

「実はなあまだ皆の事ジルに話さんどいてほしいねん」

「どうしてですか？」

「カリムからの依頼でジルの困惑するところを記録してほしい言われてなあ」

「良いんですかそんな事して」

「記録はこつちでするさかい大丈夫やあ」

「……………了解しました」「ほななあ」
念話がきれた

この時ギンガに出来たのは心の中で溜息を吐く位だった

気まずい…

なんかギンガは誰かと念話してるみたいだし…

隊員の事聞きたいんだけどな

まあそれよりもカリムだカリム

こつちの事はせめて本人に確認を取ってから進めるのが筋ってもんだろ普通…

紙切れ一枚で済ますなよしかも異動通知の書類のみ

連絡取るつにも通信には一切出ねえし

等と考えていると

「あのジルさん」

「ん、どうした？」

上目遣いでギンガが声をかけてきた

「その…やっぱり隊長って呼んだ方がいいですか？」上目遣いプラ
ス少し首を傾けながら聞いてくる

(うつ可愛いじゃねえかよ)

ギンガの様な美人がやるとほんの少しの仕草でも破壊力がある

まあカリムの場合計算の上とわかっていてもドキッとさせられるのだが…

「あの…どうかしましたか？」

ギンガが心配そうに見つめている

「あついや何でもない、でなんだっけ」

「隊長と呼んだ方がいいですかと聞いたんですけど…」

「いや別にいいよ面倒臭い」

「良いんですか？」

「問題無いてか俺自身柄じゃないんだよ隊長とか呼ばれるの」

「はあ今までにそういう経験はあるんですか？」

「あると言えばあるしないと言えはないって感じかな」

苦笑混じりにジルは言った

その後も探りを入れるギンガをあしらいながら演習場に向かった

【六課屋外演習場】

俺は今盛大に困惑している
なぜなら……

「チンク・ナカジマ以下全員集合しました」

おそらく彼女達が俺の分隊の隊員のはずである
それは別に問題ではない…
問題は…全員女性

しかも明らかに初等科位のまでいる
すると茫然としている俺にギンガが

「あのジルさん挨拶をお願いします」

そうだ俺は仮にも彼女達の隊長なんだしっかりせねば

「本日よりこのストリーム分隊の隊長になったジル・フィード二等
空尉だよろしく（ニコッ）」

よっしトチらず成功……ってあれなんで全員顔が赤いんだしかも目
が泳いでるし…

不安になりギンガを見ると

「／／／」

ダメだこっちも何故か真っ赤になってほうけてしまっている

「おいギンガ大丈夫か？」

一応声をかけてみる

「ハッ…えつとそのなんですか？」

「全員の様子がおかしいんだが…」

「えっ… あっ皆すっかりしてほらチンクから順に簡単な自己紹介」

「おお済まない姉さん」

チンクと呼ばれた少女は咳ばらいをしてから

「チンク・ナカジマだその… よろしく頼む」

続いて長い茶髪をリボンでまとめた女性が

「ディエチ・ナカジマですよろしくお願いします」

次に赤い髪の吊り目の女性が

「ノーヴェ・ナカジマだよろしく」

その次に人懐っこそうな顔立ちの女性が

「ウェンディ・ナカジマっスよろしくっス」

次に銀髪にオッドアイの少女が

「アインハルト・ストラトスです」

どうやら終わりらしい

そして最後に

「高町ヴィヴィオですよろしくお願いします」

やっと全員の自己紹介が終わった

すると

「はいはい質問良いつスカ」

ウェンディが手を挙げる

「良いぞなんだ」

「彼女とかがっているんスか」
「やっぱりきたかこの質問」

「いない」

続いてチンクが

「隊長殿は今いくつなんだ？」

「32だ…後隊長殿はやめてくれ皆名前で呼んでくれて構わない俺もお前らの事は名前で呼ぶ」

「了解した」

「しかしチンクは未っ子なのに…」

言った瞬間空気が凍った
そして…

「わ…私…姉ダァーッ」

「へ？」

ナイフが
大量の投げナイフが俺に向かって飛んでくるギンガSIDE

「よけてっ！」

私は知らずに声を発していた
しかし彼は避けるどころか防ごうとすらしなかった

飛んできたナイフの最初の一本を掴み
他のナイフを捌き始めた

私はその光景に魅入ってしまった

だから気付くのが遅れてしまった
チンクが次のモーションに入っている事に

「IS発動ランブルデトネイター」

彼の周りに散乱したナイフが一斉に爆発した

「キャッ……」

私に出来たのは爆発から逃れる事だけだった

だけど見てしまった

爆発にのまれる瞬間……彼は笑っていた

ギンガSIDE

「よけてっ！」

私は知らずに声を発していた

しかし彼は避けるどころか防ごうとすらしなかった

飛んできたナイフの最初の一本を掴み

他のナイフを捌き始めた

私はその光景に魅入ってしまった

だから気付くのが遅れてしまった

チンクが次のモーションに入っている事に

「IS発動ランブルデトネイター」

彼の周りに散乱したナイフが一斉に爆発した

「キャッ……」

私に出来たのは爆発から逃れる事だけだった

だけど見てしまった

爆発にのまれる瞬間……彼は笑っていた

チンクSIDE

「フーツ……フーツ……」

チンクは内心焦っていた

（やり過ぎた…）

最初は末っ子と言われ頭にきてナイフを投げたが大方デバイスかシールド魔法で防ぐと思っていた…

なのに彼は飛んできたナイフを使って捌きだした

ついムキになってISを使ってしまったのはやはりマズイだろう

これで隊長……ジルが死にはしないが怪我をしたらきっとそれは義父の耳に入るはずだ

そしたら間違いなく怒られる

嫌だ嫌われるやつと家族になれたのに嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ…

思考がループしていると

爆発で巻き上げられた粉塵の向こうから

「なるほどこれがお前の能力か。まあまあだな」

声がした

ジルは先ほどと同じ場所に立っていた
あれだけの爆発の中で一步も動くことなく…

ただ違うのは両の手に握られた双振りの剣だけだった
「戻れ」

ジルの一言で双振りの剣は虚空へと消えた

「さっきはすまなかったな」

ジルはチンクに声をかけた

「あつ……いやこちらこそすまなかった……その……大丈夫なのか？」

「平気だよまあちよつとやばかったけどな」

言いながらジルはチンクの頭に手を置いた

「ん……子供扱いはやめて……欲しいのだが……」

「おつと……悪い悪い」

ジルが手を退けるとギンガ達が近づいてきて

「あの大丈夫ですか？」

「ああ問題無い……お前らこそ怪我とかしてないか？」

「はい私達は大丈夫です」

「ならこの話はこれで終わりってことで……じゃあ軽く模擬戦やるか」

「はいっ」

一方こちらは演習場全体を見渡すことの出来る隊舎敷地内の芝生…

「ねえさっきの剣どうやってだしたんだろう?」

ギンガと同じ色の髪をした活発そうな女性が隣にいる親友に聞いた

「さあね…ただデバイスやレアスキルって言うよりロストログアに近い感じがするわね」

オレンジ色の長髪の女性が答える

「あゝティアにもそう見えるよね」

「ああそうそう一応参考までに少し調べてみたのよあの人の経歴…」

「どうしたの?」

「まあ説明するより見た方が速いわね…ほら」

目の前の画面を相方に見せる

「えゝつと何々……ねえティア」

「何よスバル」

「これってマジ?」

「マジよ…信じられないけどね」

画面には

「ジル・フィード」

「28・男」

「資格」

・執務官・教導官・e t c…

「経歴」

所属歴14年

・武装隊・教導隊・捜査官・査察部・辺境調査部・e t c…

備考・聖王教会派遣

通称・写本の騎士

「勝手に個人情報公開するのはどうかと思つぞ執務官殿」

急に二人の頭に声が響く

「えっ何!？」

「念話?!どこから!？」

「どこって演習場からしかないだろ」

二人は演習場を見る

ギンガが他の隊員に何かを説明している横でこちらを見てながら笑っているジル・フィードがいた

「どうせ盗み見するなら隊舎の屋上に居る連中位離れた方が良いでしょう」
「じゃあな」
念話が切れる

「ティアあそこに居るのって」

スバルは隊舎の屋上を見ていた

そこには

「なのはさんっ！？…それにフェイトさんまで」

スターズ分隊…

ライティング分隊…

その両分隊の隊長の姿がそこにはあった

演習場

「えっとじゃあ次は模擬戦のチーム分けなんだけど…」

ギンガが模擬戦の説明をしてくれている

「チーム分けはどうしますか？」

「あゝ必要無い」

「え…じゃあどうするんですか？」

「俺対お前らで十分だろ」

「さすがにそれは…」

心配するギンガ

「俺はお前達の力がどんなもんか知らないまた逆もしかりだ」

「それはそうですね」

「ならさっさと始めるぞ全員位置につけ」

全員とりあえず配置につく

「全員位置についたな」

「「「「はいっ！」「」「」

「ルールは俺がお前達を捕縛するかお前達が俺に一撃いれたら終了だ……それじゃあ…模擬戦開始」

写本の騎士

「……模擬戦開始」

ジルは辺りを見回しながら

「さすがに警戒して突っ込んで来ないか」

「さてなら俺の手の内から晒すとするか……とりあえず斬の11ページかな」

するとジルの手元に剣が現れた

「まずは……いぶりですか」

剣を一閃すると魔力を宿した斬撃が目の前の木々を両断していく

「やっぱもたないか」

言った瞬間剣が碎ける

「しょうがねえな」

ジルが手をかざすと一冊の本が顕現する

「これが殖えるまで待っても良いけど」

「さすがにそれまでおとなしくしてないか」

「一閃必中！デイベインバスター！！」

ゴオオオオオオン

魔力の放流が地面をえぐる

ジルはそれを空中に跳ぶことで回避する

「さあて最初是谁だ？」

放流の先にいたのは長い髪をサイドポニーでまとめたバリアジャケツトを着たオッドアイの15〜6才位の少女だった

（あんなのさつきいたか？）

少し考えてから

「そうか変身魔法か」

「えっ…もう気づいたんですか！？」

少女は驚いて思わず聞き返してしまった

「高町ヴィヴィオ…だろ」

「じゃあ次は全力でいかせてもらいます」

宣言するや一気に間合いを詰め蹴りを放つ

ジルはそれを横に飛び避ける

がその先には

「霸王流……断空拳!!」

「うおっと」

とつさに身体を捻り回転を利用して後ろに回り込み勢いを殺さずに蹴りを放ち拳の主を吹き飛ばす

「次は誰だ？」

拳の主は長い銀髪をツインテールにした16、7才の少女こちらも綺麗なオッドアイである

「また変身魔法か…アインハルト……だな」

「…………（コクッ）」

どうやら肯定らしい

ヴィヴィオ・アインハルトSide

（すごい）

（完全に不意を突けたと思ったのにあんなにあっさりと避けられるなんて…）

（アインハルトさん大丈夫ですか？）

隣に立つアインハルトに念話で話しかける

（大丈夫です思いの他浅かったのが幸いです）

（でもやっぱりすごいですね変身魔法をすぐに見破ったり…）

（あれは恐らく経験による勘の類だと思います）

（やっぱり私達には足りない物ですよ）

（ええ悔しいですけど……ッ）

念話をしながら今だに動かないジルが持つ本が目に映った瞬間頭痛が走った

（アインハルトさんっ！どうかしましたか？！）

（いえ…大丈夫ですなんとありません）

心配するヴィヴィオにすぐに答える

……今のはあの人の記憶？

ならあの本は少なくとも古代ベルカの遺物と言つことになる

（ヴィヴィオさん）

（はいっ何ですか？アインハルトさん）

（あの本恐らく古代ベルカにゆかりのある代物です注意して下さい）

（わかりました）

再びジルに視線を向け全身に力を入れる

隊舎屋上

金髪の女性が双眼鏡から目を離しながら友人に

「さすがカリムさんの推薦だねなのは」

「そうだねフェイトちゃん」

この二人こそ旧機動六課の主戦力

片や「金の閃光」の二つ名を持つ執務官

フェイト・T・ハラウオン

片や「エースオブエース」の二つ名を持つ教導官

高町なのは

この二人に部隊長の八神はやてを加え仲良し三人組となる

「でもまだまだ本気じゃないね」

新任の分隊長の実力を知る為に来ているのにこれでは意味がない
すると隊舎内と屋上を繋ぐ扉が開き

「「なのはさんフェイトさんお久しぶりです」」

スバルとティアナである

「二人共久しぶり」

「元気にしてた？」

「「はいっ」」

「そうだ

二人から見てあの人はどう見えるかな？」

なのはは二人に質問した

「えっと…すごい人……みたい何ですけど正直わかりません」

スバルが答える

「私もスバルと同じです

なのはさんにはどう見えますか？」

ティアナが聞く

それに対してなのはは

「実は私達もよくわからないんだよね」

「なのはさん達でもですか？」

「一応資料が来てから執務官の先輩とかにも聞いたんだけど…」

「誰も彼の戦闘スタイルを詳しくは知らないんだって」

「えっと……それって何かおかしい事ですか？」

「おかしいに決まってるでしょうが馬鹿スバルのスバルの耳元でティアナが怒鳴る」

「あんたも見ただしょうあの人の経歴を」

「見たけど一体何の関係が……」

「普通あれだけ異動を繰り返してるなら功績もそれこそ戦闘記録も残って当たり前なのよ」

「あつ！確かに教導官や武装隊時代のやつなら在るはずだよね」

「本来なら二人の言う通り何かしらの記録が在るはずなんだけど……」
「なのはの言葉にティアナが続いた」

「閲覧規制……ですか？」

「うん：執務官をしている私や部隊長のはやてでさえ閲覧出来ない位嚴重なやつがね」

その時爆音が轟いた

「どうやら動いたみたいだよ」

四人は演習場に目を向けた

爆音が轟く少し前：

（ディエチあなたの砲撃を合図に一斉に行くわよ）

（OKギン姉まかせて）

「IS発動「ヘビィバレル」」

「シューーーーーーッ」

砲身から放たれたエネルギーは目標に向かって突き進む

「後は任せたよみんな」

そう言つてディエチは次の砲撃の為に移動を始めた

ギンガSide

（砲撃っ！行くわよノーヴェ）

（おう！）

「ウイングロード！」

魔法陣が展開されるとギンガの足元から蒼い光が道の様に伸び始めた

ノーヴエSide

「行くぜっ！IS発動エアライナー！」

ノーヴエの足元からギンガと同じ様に黄色い光が伸び始めた

チンク・ウエンディSide

「始まった様なウエンディ」

「そうみたいッスねチンク姉」

「私達も動くぞ」

「了解ッス」

ヴィヴィオ・アインハルトSide

（アインハルトさん私達もこの隙に…）

（ええそうですね）

（おっやっとなギンガ達も動いたか）

ジルは自分に向かってくる砲撃を見据えると一言

「ワークス」 あいよ

左手の中指に付けた指輪が答える

そして爆音

ドゴオオオオオーッ

辺りに爆煙が立ち込める

するとジルを挟み込む様に爆煙を蒼と黄色の二つの光の道が貫く

そしてその上を疾走するギンガとノーヴェ

「カートリッジロード！」

ガシュッガシュッ

「ジェットエッジ！」

キイイイイイー

ギンガは左拳を振りかぶり

ノーヴェは跳躍の体勢をとる

そして

「リボルバアアアッ！！！」

スピナー部が火花を散らす

「ストライクッ！！」

「スパイクッ！！」

二人の渾身の一撃が放たれた

「成る程なかなかだ」

煙りが晴れた

そこには黒いコートの下に騎士服らしき物を着たジルが左右にシールド魔法を展開して二人の攻撃を止めていた

「まず二人」

ジルが呟くと

シールドから魔力の鎖が伸びて
「きゃっ」

「くそっ」

二人を捕縛した

「さて後五人」

「今だウェンディ」

声は真上から聞こえた

「フアイヤーツス」

ジルが上を向くとギンガとノーヴェの作った足場を利用してウェンデイがボードからエネルギー弾を放つ瞬間だった

ウェンデイSide

「もらったツス」

ガウウンッ

エネルギー弾は一直線にジルに当たると思っていた……いやはずだったしかし

ドゴッ

エネルギー弾は地面をえぐっただけだった

慌ててジルの姿を捜そうとした時後ろから

「はい三人目」

そこでウェンデイの意識はとぎれた

そして次に目覚めた時にはすべて終わっていた

「それじゃあ今日はこれで終わりだ解散」

黒いコートと騎士服？から管理局の制服に戻ったジルが宣言した

「……お疲れ様でした」……」

ジル以外はぐったりしていた

「ああお疲れさん」

最初の模擬戦の後二回程同じルールでやったのだが結果は見えての通りである

ストリーム分隊初の訓練はこうして幕を閉じた

「さて俺もシャワー浴びてくるか」

ジルはコンソールを操作して演習場を初期化してから隊舎に向かった

隊舎前

「やっぱ慣れない事はするもんじゃねえな」

良く言っぜいつもよりはずっと長く相手の出方を見てた癖によ

ジルの独り言に返事をしたのは左手の指輪だった

ていうかよ毎度の事だがお前俺の事ちゃんと紹介する気あんの
かよ

「ねえよ面倒臭え」

今回は頼むから紹介してくれよな

「なんでだよ」

だってよここにはあのレイジングハート嬢達がいるんだぜ

「情報を漏らさないなら許可してやるよ」

流石俺の相方話しが早いぜ

「ハアア」

ジルが指輪「ワークス」と話しながら歩いていると

「あのー少しお時間よろしいですか？」

前方から教導隊の制服を着た女性……高町なのはに声をかけられた

「良いですよ高町一等空尉殿」

隊舎ロビー

二人はロビーにあるソファーにテーブルを挟んで向かい合っていた

「で、一体何の用ですか？」

「単刀直入に聞きます

あなたは何者ですか？」

（うわぁ面倒な事聞いてきやがった）

「それはどういった意味ですか？」

「ここ機動六課の中だという意味です」

「とりあえず”ここ”にいる間はストリーム分隊隊長のつもりだ」

「それならもう少し手の内を見せてくれてもよかったんじゃないですか？」

「なら特別に」

言ってジルは左手に付けたワークスを外してテーブルの上に置いた

「こいつが俺のデバイスだ」

お初にお目にかかりますレイジングハート嬢のマスター殿

「え…っとこちらこそ初めまして」

「何カッコつけてんだよ」

ウルセーよ良いだろう少し位

「スマンなこいつあんたのデバイスのファンらしいんだ」

「ありがとうございます？」

「まあこんな事はどうでもいいんだ」

良くねえよコラ

「こいつの役割は簡単だとある本の検索と転送だ」

「えっそれって一体…」

「後はヴェロッサかカリムに聞いてくれ」

「それから盗み聞きは感心しないと他の連中に伝えとけ」

言った瞬間近くの扉から

ガタッタタタタタタタタタッ…

何人かが走り去る音がしたが聞かなかった事にした

「にやはははは…」

一等空尉殿も苦笑するしかない様だ

「じゃあ俺はそろそろ行きますよ」

おーどこにでも行っちゃえ

「お前もくんだよ」

テーブルの上のワークスを掴み指に嵌めた

「うん、それじゃあまた」

「ああ、また」

返事をして俺はシャワー室に向かって歩き始めた

敵と悪と猪ナイツ 前

過ぎたる力を手に彼らは殺戮を行う
自分達の理想の為に願いの為に
そして自分達の信奉する神の為に…

急な異動から四日…

まだ平和である

「アクセル……シューーット!!」

ドゴドゴドゴッ…

「「「「「キヤアアアアア……」「」「」

……平和である

「今日の訓練はここまでみんなしつかり休んでね」
「「「あ、ありがとうございました」」「」

全員その場へたりこむ

「だいぶマシになってきたな」

訓練を終えた高町なのはの耳にそんな言葉が聞こえた
「な少しは自分の隊の面倒位見てくれるかな」

「まだ当分は現役教導官殿にお任せするよ」

「多分それももうすぐだけど…」

ビッビッビッビッ

突然の警報そして通信が入る

「こちらロングアーチ至急応答願います」

「こちらストリーム1とスターズ1何があった？」

「それが廃墟区画に突然強力な魔力反応を感知しかも居住区に向け
進行中の為至急出動願います」

「ストリーム1了解した」

「スターズ1了解」

「フォワード連中はどうしてる」

「それがヘリが不調で早くて10分掛かります」

「なら飛行許可をくれ単独先行して片づけるスターズ1は連中と一
緒に後からきてくれ」

指示を出すとなのはが

「え、でもはやてちゃんの指示がまだ…」

するとはやてが通信で

「なのはちゃん今はジルの言う通りにするんや
ジルも気いつけてな」

「わかったよ」

「了解だワークスセットアップ」

合点承知だぜ

ジルは黒い魔力光に包まれた

そして光が消えると

黒い騎士服を纏って現れた

「じゃ先行くぜ」

風が吹くとジルの姿はそこには無かった

「でも本当に彼だけで大丈夫かな」

心配するなのはにはやては

「心配症やな」なのはちゃんは

大丈夫外回りに行つとったフェイトちゃんとシグナムが向かつてくれとるし10分したらなのはちゃんもみんなと一緒に向かえるしいざとなつたら私も出る」

「うんそうだね大丈夫だよな」

なのはは風が流れる方を見据えながら言った

ミッドチルダ首都グラガナン北西廃墟区画

「良いね」この感じ最高だZE」

「……………チカラ……………」

大小二つの影が居住区に向かっていた

「やっぱり一気に居住区でもよかったんじゃないの」

「……………油断……………スルナ」

「んな図体して何ビビってんだよオッサン」

「……………少し……………黙れ……………ガキ」

「何だとてもえやんのかコラ」

「……………ダカラ……………黙れ……………っ」

「何どうした…やっとお出ましか」

黒い風が二つの影の前に立ち塞がった

「こちら時空管理局新機動六課ストリーム分隊隊長ジル・フィードだ
てめえらおとなしく投降しやがれ」

ジルは言いながら左手に一冊の本を出現させた

「ハア何言ってやがんだ散らすぞコラ」

小さい影が虚空から鎖鎌を

「……………ツブス」

大きな影は両手に鉄甲をそれぞれ装備した

そして最初に動いたのは小さい影だった

「さあーてめえの臓物ブチまけてやんZE」
ジルに向かって地を這う様に駆ける

「撃章3ページ」

あいよ

ワークスの声が聞こえた時にはジルの右手にはやや長めの太い銃身を持つ黒い拳銃が握られていた

「交渉決裂か」

ジルは小さい影に銃を向けると三発の黒い魔力の弾丸が牙を剥いた

「チイツ…こすい真似しやがってガンナーかよ」

悪態をつきながら左右に揺れて回避しながらも近付き……………跳躍して

「ヒヤッハー」

鎌を振り下ろす

それを銃身で受け止めることに成功した瞬間鎌は銃身を熔かしながら刃を進めていた

「ムダムダムダーッ

こいつの刃に熔かせない物何かないだよこのロストログア（エクナリヤの鎌）にはYO」

ジルは後ろに跳ぶことで刃をかわしたが銃身は真つ二つにされていた
「なるほどまあまあだなっ」と

ジルがもう一度跳躍すると同時にジルがいた場所に巨大な拳が落ちてきた

「ハズシタカ…」

デカイ方が鉄甲付きの拳を振り下ろしていた

「何だよ意外に動けるじゃねえかよ」

「デメエこそ避けてばっかりじゃんかよオッサン」

「お前こそ粹がるならかすり傷位つけてみるよガキ」

挑発をかえされて小さい方はキレそうになるのを堪えながら

「ならお望み通りにしてやんYO」

今度は鎖を使い鎌を振り回し投擲した

「もうさつきみたいには武器で防げないZE」

「そいつはどうか」

「何っ!」

「斬章15ページ」

ジルは何かを掴むと同時にソレを振り鎌を弾いた

「な、何でだYO」

小さい方は愕然としている

なぜなら人の手で操る事が出来るとは言え今弾かれたそれはロスト
ロギアであるからだ

「何なんだソレはありえないありえないありえないんだＹＯこんなのはっっ！」

喚きながらなお鎖鎌を振り回しつづける

それを見ながらジルは持っていたソレを消して呟く

「……………脆いな」

それを聞いて二人組は

「なあにがだよおおおっ電波かテメエは」

「……………クロス」

突撃する

それを見つめながらジルは

問い掛ける

「貴様らの悪を見せてみる」

瞬間本が発光した

ただその光は暗く冷たく鮮烈な血の様な……………闇

そう本から溢れ出ているのは血色の闇もしくは闇色の血

二人組はソレを見て悪寒が走った

「顕現せよ血の悪夢」

シグナムSide

「何が起きているんだ一体」

シグナムは驚愕していた

つい数分前までテストロッサと二人で外回りをしていた時にアラートが鳴り主はやてから先行した分隊長の応援のために急いで現場に向かつて飛行していた
それなのに……何なんだアレは

現場と思われる場所から溢れ出ている闇

見ているだけで心が堕ちてしまいそんな程黒くそして血の様に朱い闇

私もテストロッサも身体がすくんでただ眺める事しかできなかった

やがて闇は発生源に飲まれる様に消えていた

もしあの闇を統べる者が今回の事件の黒幕なら拘束や逮捕では無く消さねばならない

私は本能的にそう感じて動いた

それを見てテストロッサも動く

発生源には三人立っていた

一人は黒い騎士服の様なものを着て手には先程の闇と同じ色のいび

つな剣を持っていた

後の二人は鎖鎌と鉄甲を装備しているがその顔は恐怖に歪めていた

私は咄嗟に

(テストロッサ私は黒いのを抑えるお前は残りを頼む)

一方的に伝えると私は愛剣を構え切り掛かった

テストロッサが後ろで何か言っている様だが私には届かなかった

ロングアーチSide

ビーンビーンビーンビーンビーンビーン

司令室にアラートが鳴り響く

「何や！何があったんやっ！」

はやては状況を把握しようとオペレーションスタッフに問い掛ける

「それが戦闘区域にて突然巨大な魔力反応が発生尚も拡大しています」

オペレーションスタッフはさらに報告を続ける

「対象推定リンクA……いえS+えっ嘘まだ上がるの……」

現場の映像を映しているモニターは何も映さず沈黙しオペレーション画面に映るグラフ等が次々とエラーを表示する

それを見たはやては自分も出ようと席を立とうとすると副官のグリフィスが

「落ち着いて下さい八神部隊長」

「これが落ち着いていられる訳ないやろ」

「だからこそです……現場にはストリーム1それにライトニング1、2更にフォワードチームとストリーム分隊にスターズ1が現場に向かっています」

今貴女が出て行かれるのはかえって危険です彼らを信じましょう」

「そうやねそやったね今は昔とちゃうんかったな」

はやては席に戻り各員に指示を出しはじめる

それを聞きながらグリフィスは一つの可能性を考えていた…それはこの反応がストリーム1ジル・フィードが発するものではないのかと言つもの

だが

グリフィスはそれを口にしなかったなぜならまだ彼自身ありえないと思っていたからである

グリフィスが思考を終えると

モニターが正常に映しはじめ計器はエラーを発するのを止めていたグリフィスはオペレーターに尋ねた

「ルキノ今の状況は？」

「はいどうやら先程の魔力反応は収縮したみたいですただ……」

歯切れの悪いルキノにグリフィスは

「ただどうしたんです？」

「その収縮した反応の最大魔力レベルがその……SSSなんです」
その一言にロングアーチスタッフは騒然となった

スターズ1 & amp ; フォワードチームSide

輸送ヘリ内

「ヴァイス陸曹長まだ着かないのか」

本日三度目のチンクの質問をヴァイスは

「もうすぐもうすぐ」

面倒そうに適当に答える

「ヴァイス君現場まで後どの位かな」

なのはの質問にヴァイスは

「後二三分って所ですぜ」

先程とは違い真面目に答える

それを見たチンクが

「おいっ！何なんだその態度の違いっおわっ…」

ヴァイスに文句を言おうとするとヘリが激しく揺れる

「ヴァイス君何があったの」

「すみません…何かスゲー魔力波で…」

ヴァイスのおかげでヘリは何とか体勢を立て直した

「にしても何だったんださっきのは」

「こちらスターズ1ロングアーチ応答して下さい」

この時ロングアーチ一同巨大な魔力反応でいっぱいだった

「とりあえず急いだ方がいいみたいっすね」

「うんヴァイス君お願い」

ヘリは更に加速して現場に向かった

ジルSide

（さてとコイツを出したからにはさっさと決めねえとな）

ジルは闇色の血刃を正面に構えて

「さあお前らの悪を喰らい尽くしてやるよ」

それを見た二人組は半ば失いかけた殺意と戦意を奮い立たせ突っ込んでくる

「ガアアアアアアッ」

その時ジルは背後で二つの魔法の発動を感じた

「何だもう着いたのかよ」

「バインドッ！」

「穿空牙っ」

おそらくバインドはハラウオン執務官もう一つは確かシグナムだったか

ならもう良いだろうと血刃を消そうとして気づく

片方は自分に向かって放たれている事に…

「マジ…かよつと！」

ジルは素早く振り向き接近する何かに向けて血刃を振るう

「くらえ下郎がああああ！」

ぶつかり合う刃からは火花が散る

「レヴァンティンツ！！！」

「カシユンカシユン」

（え…ちょ…ま）

シグナムは鏝ぜり合いの体勢から

「飛竜一閃！！！」

ズッゴオオオオオオオオオオオオ

粉塵の中からジルが飛び出る

「ちよつと待て話を聞……」

それを追いシグナムが

「聞く耳持たん」

追撃をかける

「貴様の様な悪鬼は今ここで討つ」

「ええいワークス！」

何だよ

「罪華の血刃を破棄して再誕の剣を！」
後が酷いぜえ

血刃が消え代わりに

「だからどうした」

飾り気の無いシンプルな剣が現れる

「紫電一閃っ！！」

「ハアアアッ！！」

剣と剣がぶつかり合い火花が散る

更に二度三度剣閃を交えた時に変化が生じた

パキンッ

金属の碎ける音とともにジルの剣が碎ける

「貰ったあああっ！」

その隙にシグナムが剣を振るう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4851m/>

魔法少女リリカルなのはSTREAM

2010年12月25日19時31分発行